慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蕭紅作品にみる女性観について
Sub Title	The Female Image in the writings of Xiao Hong
Author	林, 敏潔(Lin, Min Jie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Language, culture and communication). No.38 (2007. 3) ,p.179- 201
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20070331-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蕭紅作品にみる女性観について

林　　敏　潔

中国の女性作家・蕭紅（1911年―1942年）の文壇における活動は僅か十年あまりに過ぎなかったが，それにもかかわらず彼女は中国文学史上で特筆すべき存在となっている[1)]。その蕭紅に関する研究の歴史はすでに七十年を閲しており，この間，中国の現代文学研究者たちによって，彼女の作品は「抗日文学」,「左翼文学」,「愛国小説」,「反帝国作品」,「東北抗日救亡作品」などの高い評価を得てきた。概して言えば，このような研究状況が中国現代文学研究一般の傾向と同様に1980年代まで続いたが，1980年頃から蕭紅研究に変化の兆しが見られるようになった。それはまず，蕭紅作品に対する評価の観点の変化であったように思われる。すなわち,「反帝愛国」から「国民意識の改造」へと評価の観点が移行し始めたのである。しかし，それによって直ちに蕭紅作品に対する分析が全面的に深まったとはいえない。評価の観点が変わっても，作品に込められた蕭紅の意図は依然として紋切り型にしか解釈されなかった。つまり，蕭紅作品がなぜ同時代作家たちの作品よりも多くの人々に好かれ，読まれ続けているのかという，蕭紅作品の本質に関わる問題の解明が十分になされてこなかったのである。

蕭紅の諸作品に触れてみると，そこに貫かれているのは，強烈な女性意識である。ところが，この女性意識は,「抗日救亡」とか「国民的主題」等々という蕭紅研究者たちのアプリオリな研究課題に掻き消されてしまって，長い間見失われてきた。すでに1930年代に蕭紅の特異な存在に気づき，彼女の本質に触れていた魯迅でさえも，彼女の作品に展開する女性の精神世界に深く入り込むことはできなかったのである[2)]。

蕭紅は，中国東北生まれの女性作家である。彼女は文壇に登場するや，瞬く間にその個性的な特異性を発揮した。しかし彼女は，当時の多くの左翼作家たちが好んでそうしたように，あまり正面から戦争や階級社会を描こうとはしなかった。彼女にとって最大の関心事は,「女性とは何か」という彼女自身にも突きつけられている深刻な問題であった。蕭紅が歩んだ人生を皮相的に見る人は，彼女も所詮一人のか弱き女性に過ぎなかったと思う

かもしれない。しかし，彼女は，類まれなる筆力で当時の中国の女性世界を描き出すことのできた女流作家であったのである。

中国の蕭紅研究の新地平は，この“女性の視点”の発見によって切り拓かれた。孟悦と戴錦華は，1989年に著した『浮出歴史地表』の中で，蕭紅の小説『生死場』を女性の視点から分析し，新しい蕭紅研究の先駆けとなった[3)]。さらに1992年2月，ハーバード大学の費正清教授は，「性別観念を用いた中国婦女の分析――文化と国家」というテーマで国際シンポジウムを開催したが，このシンポジウムを契機として，ジェンダー論の視点から中国文学作品を解読するスタイルが広く取り入れられるようになった。カルフォルニア大学バークレー校の劉禾助教授はこのシンポジウムの席上で，「『生死場』の再考察――婦女と民族国家」という論文を発表した。ここで彼は，蕭紅が『生死場』の前半10章は女性のさまざまな身体的体験を通して「生」と「死」の特別な意味を描き出し，後半7章では，それにもかかわらず当時の中国女性が「民族的な主体」になりえなかったことを描いているという。こうして，劉氏は女性の「身体」が民族や国家の激しい交錯・衝突を顕現していることを感知した蕭紅の鋭い感性を探り当てたのである。この論文は，いわば女性主義の方法を用いた蕭紅研究の手本ともなった。これ以降，女性主義の方法で蕭紅を研究する論文が増加していった。例えば鄒午蓉は「独特の視角，深切なる憂憤」の中で，蕭紅作品は「女性の命の価値とその意義から女性たちの悲劇的な運命を表現したもので，何気ない日常生活の中から目を背けたくなる残酷な事実を取り出し，女性の切々たる憂憤の情を表現した」と指摘している[4)]。また，曹利群は「時代，そして女性の関懐及び女性の文章」の中で，他の作家たちが蕭紅に及ばないのは，彼女が「時代性のあるテーマを描くだけではなく，終始強い女性意識を持ち，独特な審美的表現を駆使して，型に嵌らず時勢の流れに囚われなかったことにある」[5)] と述べている。

本論文は，こうした新しい蕭紅研究の視点に立って，蕭紅の作品全体の中に込められた彼女の女性観を考察しようとするものである。

1　女の旅路　生・産・病・老・死

蕭紅が描く人物像は，男であれ女であれ，その多くは群像として符号化された姿で登場し，風貌や容姿などにはあまりこだわりが感じられない。蕭紅作品の中でその名が挙げられている人物は，『生死場』に登場する金枝，月英，二里半の麻面婆，李二婶や『呼蘭河伝』の王婆，丸顔の嫁，王大姑娘などであるが，彼女たちは往々にして自立した個人とし

てではなく，男性社会の随従者として描かれている。男性社会では女は単なる同居人でしかない。蕭紅によると，幼い頃に自分の「楽園」を持ちえた女性たちも，長ずれば例外なく実家から嫁ぎ先へと追われてさまよわなければならなかった。それは，いわば楽園から生き地獄への追放であった。

蕭紅は常に「人」の存在意義というものに関心を寄せていた。彼女にとって，ほとんどの人々は人生を自ら決めることのできない存在であり，「物」のような非自立的な存在であった。彼女の作品『生死場』では，動物のような生き死に様を演じる一群の物質化された人物たちが描かれる。また『呼蘭河伝』では，「人」としてあるべき姿で描かれるのは，幼年期の「私」と祖父だけである。凶暴さによって人間性を失っている父親，貧しさや愚かさゆえに良心を失っている下男・貧乏人たちは「人」たりえなかった。さらに『呼蘭河伝』に登場する「大泥坑」や「跳大神」のような偏見的な習わしに支配される人々や支配する側に身を転じる者たちは，非情な「殺人」の道具と化している。蕭紅は，こうした本来の生き方をしていない人々の姿を描く一方で，「人」としての真の生き方を執拗に追い続けた。しかし，現実の女性たちは往々にして実現不可能な望みを男たちに託しており，女性たちが頼みとするその男たちは彼女たちの望みを断ち切る扼殺者になってしまう。呼蘭河畔の愚かな夫婦や馬伯楽のような文明社会から取り残された「知識人」――彼らは「人」として何らの尊厳も寄せられない存在である。蕭紅はこうした人々の「天命」を冷徹に描くと同時に，彼らが「人」となる可能性を見出そうと努めている。彼らに対する蕭紅の「救済手法」は二つあった。その一つは「愛」と「温かさ」を憧憬することである。もう一つは，無常な「生」をあるがままに理解することと畏れることのない「死」に至らしめることであった。

彼女の作品に登場する「子供の頃に遊んだ裏庭」や「神の家」は，登場人物に「人」たりうる可能性を付与するための抒情的装置である。清浄な地である尼寺を探す『生死場』の金枝や，安らぎを天国に求めた『呼蘭河伝』の王婆などは，現実にはそれを見つけられないにもかかわらず，愛の精神世界を希求し続ける人々として描かれている。

一方，この世は本来「一所不住の世界」であり，「人」はもともと帰る家を持たない存在であると蕭紅は考える。貧苦であるが強靭な王婆の一生，『小城三月』で死に際に従兄の手をとりながら泣きくずれる翠姨，小豆の死後の静まり返った蓮の池（『蓮花池』）――これらは，蕭紅にとって冷徹な現実（＝「無常な生」）であるとともに，畏れることのない「死」と共にある魂の救済の場であった。

蕭紅は，女性の容姿から「やさしさ」というヴェールを取り去り，その実際の姿や内心

をさらけ出させる手法もよく用いている。そうして彼女は，女性自身の内に潜む「父権文化」を抉り出そうとした。女の欲望，抗争，愛憎，憂い――それらは彼女の生きた時代の「女性」の中に渦巻いており，ひいてはそれが女性同士の蔑みや男女間の激しい葛藤となって現実化していた。女性が「物質化」し異化した結果として現れるそれらの現象は，女性本来の姿ではない，と蕭紅は考える。つまり，当時の中国社会における女性は物質化し，動物に過ぎない存在であるが故に，そうした女性像が現実化しているのである。蕭紅はそうした現実を冷徹な眼で見つめている。女たちが男たちのために自分自身を捨てることは常態化している。こういう社会では，女は「女性的な女」になるため教育されるが，そうするのは男たちのためだけではない。女もまた女を「物」として扱うように仕向けられている。呼蘭河畔で人は動物と同じように，慌しく出産し，そして死んでいく。彼らの生涯は虫や家畜同然で，殴られ，苛められ，蹂躙され，虐待され，そして最後は年とった馬のように屠殺場に送られる。人生経験が豊富な王婆は，生活に疲れ果てた末に，彼女と同じく疲労しきった馬を売り飛ばさなくてはならなかった。

> 老馬よ，とび色の馬よ，板塀のところで寂しそうに立ち，塀に打ち付けてある馬皮で痒いところを掻いている。今はまだ馬のままだが，もうすぐ一枚の皮になってしまうのだ！　（王婆は突然）屠殺用の包丁が自分の背中を貫くことを想像して，ぞっとした[6]。

もはや彼女には馬の売値を交渉する気力も失せていた。彼女は疲れ果てながら次のように言った。「幾らでもいいからおくれ。それで帰るから。面倒なことはないよ！」

王婆が振り返ると，馬はその後ろを歩いている。馬は何も知らず，家に帰ろうとする。馬を売った王婆はまるで葬式から帰って来たようである。この老馬は飼い主である王婆の一生を暗示しているのである。

蕭紅作品には生，老，病，死の描写が溢れている。それは女性の生き方に対する作者の執拗なまでの関心から発している。妊婦の出産，老人，病人，死にゆく人，これらは彼女の作品中では主題と関連する重要なファクターとなっている。

生命は女から生まれ，女が命を育む。そのため多くの場合，出産は女にとって幸せなもの，女しか経験できないものとして肯定的にとらえられるが，時と場合によっては，逆に苦痛で悲しいものへと転化する。愛情のない出産，肉体的苦痛――蕭紅の作品に描かれる出産はまさに後者を象徴するものである。彼女が初めて出産を経験したのは 20 歳の時で，そこで生死をさまようほどの苦しみを経験したといわれる。蕭紅にとっては出産という創

造的行為は肉体的にも精神的にも大きな苦痛を伴うものであった。蕭紅自身のこの出産体験が当時の女性の境遇を象徴する存在の一つとして妊婦を選択させたと考えられる。上述した『王阿嫂の死』に登場する主人公の王阿嫂は難産のため死んでしまう。下層階級の女の出産と死を描いたこの作品のタッチは極めて写実的である。そうしたタッチを可能ならしめているのは，女として，母親としての蕭紅の実際の経験であるように思われる。

> 王阿嫂はオンドルの上で最後に重く叫んだ。彼女の身体は自分の血で染まっている。そしてその血の中で小さな，新しい生き物がもがいていた。

王阿嫂の死後の場景描写は，さらに凄まじい。

> 王阿嫂の眼はまるで大きな真珠のように光っていたが，もはや動くことはなかった。彼女の開いた口は恐ろしく，まるで猿の口ように歯が前に飛び出していた[7)]。

一家離散という悲劇を体験した王阿嫂は，出産という更なる苦難を乗り越えることができずに死んでしまう。しかし，この「死」こそが，蕭紅が主人公王阿嫂に与えた救済策だったのである。小説の中では，王阿嫂の流した血の海の中から誕生した「小さな生き物」も５分もすると息絶えてしまう。ここにも出産後に子供を捨てた蕭紅自身の経験が反映しているように思われる。

『生死場』の中の五姑姑（叔母）の姉の出産シーンは次のように描かれる。

> 血に染まったその女性は身動き一つ取れなかった。彼女は，生死を分ける最後の一瞬にもがくこともできなかったのである。空が明らむと，恐怖は硬直した死体のように中へと入ってきた。彼女は座ることもできずに苦しんでいた。産婆は彼女の濡れた上着を取り替えてやった。ドアの開く音がすると彼女はまた慌てふためき，まるで精神病患者のようだった。一言の声を出すことも許されず苦しんでいるその女性は，もしそばに穴があったならばそこに飛び込んでいただろう。またそばに毒があったならばそれを飲むにちがいなかった。彼女は全てを敵対視していて，窓際の棚も彼女に蹴り倒されそうだった。彼女は自分の足を折ってしまいたいと思うほど，まるで蒸篭に入れられたように全身が熱さで引き裂かれているようだった[8)]。

蕭紅の小説は女性の死で始まり，女性の死で終わるといっても過言ではない。彼女の作品の中で，死に至る様子が克明に描かれる対象の全ては女性である。特に前期の作品においては，その叙述のスタイルも直接的で，大胆であるが，後期になると直接的描写が影をひそめ，次第に暗示的になる[9)]。

病気の女性が多く登場するのも蕭紅作品の特徴である。動作が緩慢な妊婦や身も心も病んだ虚弱な女性たちは，社会的に否定される女性像を暗示している。彼女らは，男たちから冷たい視線を投げかけられ，男性社会からさまざまな抑圧を受ける。「病気」――それは女性たちが受けるあらゆる傷の隠語であり，彼女らの精神世界の喪失を象徴する言葉でもあった。蕭紅が動作の緩慢な女性を描く時は，必ずといってよいほど暴力と死に関する描写が随伴する。

『生死場』に出てくる身重の女性は，お産を間近に控えて死の淵をさまよっている。また，商店街シリーズに出てくる原因不明の「腹痛」を抱える「私」は，不健康で無気力な生活を送っている。翠姨は離れられない病床で自分の理想を紛らわせている。馮歪嘴子の妻，王大姑娘は柴や草の積んである家の中で養生しながら，外部からの中傷や風当たりを避けている。このように「病気」は「死」への伏線でもあるが，実のところ女性が外部との衝突を避けるための口実ともなっている。

蕭紅がその作品中で，好んで「病気持ちの女」たちを取り上げるのは，女がこの世界で生まれながらの弱者であることを暗示するのに有効であると考えていたからであろう。貧しさ，失望，無情，恥辱などによって扼殺される女たちには，頼るところも，無実を告げるところも，行く場所さえなかった。そのような中で，「病気」は彼女たちの苦難を象徴しつつ，それを緩和するものともとなったし，「死」は彼女たちの苦痛の最大の表徴であるとともに，同時にそこからの解放をも意味するものであった。こうした女性たちの生き様や死に様が，蕭紅にとっては本質的な問題を探る糸口であったのである。

2 「家」：楽園と失楽園

「家」は「国」の原型であり，「家」を構成する者が「国」の構成員でもある。中国社会では久しく「家」や「国」における上下の関係が「社会秩序」として通念化され，絶対的な支配を正当化するための理念とされてきた。この秩序の下では，妻は夫に仕え，息子は父に仕え，臣下は主君に仕えなければならなかった。中国における伝統的な「家」は，この秩序規範を厳然として顕現する場所であった。

蕭紅はそうした郷紳の家庭に生まれ，父親は知識人であった。しかし，蕭紅によると，その父は娘の蕭紅を教育しなかった。母親や継母も父親と同じように振舞った。彼女らはひたすら父親に諂い，娘の蕭紅が愛情を求めても無視し続けた。女性にとって暗澹たるこうした家庭の中にあって，祖父だけが蕭紅の味方であった。祖父は彼女に詩を暗誦させ，一緒に遊んでくれた。聡明な蕭紅は中学校まで進んだが，彼女が学校に通うことをめぐっても家庭内では一悶着あった。そして，自分自身の結婚問題をめぐって家族と衝突した蕭紅は，ついに家を飛び出すことになるのである。

蕭紅は，幼い頃から寂しさや屈辱を人一倍意識する早熟な子供であった。彼女にとって「父親の家」と「裏庭」は相対立する二つの生活空間であった。彼女は父親の威厳を示す家の中では常に悔しい思いをしたが，裏庭は避難場所であり，活力を養う「自分の家」でもあった。その裏庭で鶏の卵をともに食べた数人は別として，彼女にはほとんど幼年期の遊び仲間というものがいなかった。さらに彼女は婚姻の相手にも恵まれなかった。一回目の事実婚では，駆け落ちした後に，身ごもったまま捨てられた。その後の婚姻は心が通じ合わなかった。20 歳の時に「父親の家」から逃げ出して以来，香港で客死する 31 歳の時まで，彼女の生活はいわば流浪生活の連続であった。彼女の恋愛歴は，結ばれない初恋から始まって，問題絡みの一回目の事実婚，蕭軍との艱難の愛，端木との早まった愛へと続いた。こうした遍歴のゆえに，「半生，白い眼で見られ，冷遇され，悔しい」[10] と蕭紅は述懐している。しかし，こうした恵まれない生活の中でも蕭紅が希求して止まなかったものは，人間的な「愛と温かみ」であった。

『呼蘭河伝』の第 3 章はすべて裏庭の描写で，そこには楽しさに満ち溢れた彼女の幼年期が重ね合わせられている。しかし，その第 4 章では，「我が家は荒涼としている」，「我が家の庭はとても荒涼としている」，「秋には賑やかになるどころか荒涼として寂しい」[11] という表現が繰り返され，子供の世界は大人の眼から見たそれに一変する。このように相反する世界を叙述するスタイルも蕭紅独特のものである。子供の頃に関する叙述では，蕭紅は屋根や木に登ったり，物を盗んだり，と何でもやる大胆で活発な子供である。だが，成長するにつれて，彼女は生きる活力や生活に対する自信を失い，屈折した過敏な弱い人間に変わっていったのである。

上記のような不幸な個人的体験に加えて，長い流浪生活が蕭紅の創作活動に影響を与えているように思われる。蕭紅作品には自分自身に関する叙述がまま見受けられ，男性社会の中で生きる自分の立場を明らかにしている。傷つけられ圧迫されることに敏感であった蕭紅には，父親や郷里の人々の冷ややかな視線，侵略者の手に落ちた「家」は，とても忘

れがたいものであった。

郷里という概念は，私にはもともと身近なものではない。しかし，誰かがその話をすると，たちまち動揺してしまう。日本に占領される前であっても，私にとっての「家」は無いにも等しかった。

不眠は明け方までずっと続いた。高射砲の音の中で，郷里と同じように震えて鳴く原野の鶏の声が聞えた[12)]。

「蜜月」中でも蕭紅は苦い体験を十分に味わっていた。彼女は社会に対して次のように呼びかけている。

白昼，私は家具の前に黙って座らせられた。口があるのに喋れない。足があるのに歩けない。手があるのに何もできない。廃人となんら変わらず，なんと寂しいことか。視線すら塀に遮られ，窓辺の雀さえも見ることができない。窓ガラスには綿毛のような雪が積もっている。これが私にとっての「家」なのだ。陽光もなく，暖かさもない。声も色彩もない寂しく貧しい家。草も生えぬ荒涼とした広場[13)]。

蕭紅は，子供の頃の「裏庭」と「恋人の翼」が自分にとっての避難場所で幸福の理想郷であったと叙述している。「美しい裏庭」という言葉は彼女の常套文句となって，「父親の家庭」と「暴風雨」は，彼女にとって強権と侮辱，威厳と圧迫の象徴であった。

蕭紅の描く「家」はみごとな園林のある立派な屋敷ではない。野草が生い茂る庭のある普通の家である。「これといった花はなく，どれも草などでたいした価値ありません。冬になると雪に埋もれてみんな死んでしまいます。春には地面をならして，また種をまきます。時にはそうしなくても，自然に芽が出てきます」[14)]。荒れ果てた庭の中の野草は，自生しては自滅し，気にもかけられず，抜かれもしない。これはごく当たり前な環境のようでもある。蕭紅がこうした「父親の家」を離れたのは，愛のかけらすらない家庭生活に耐えられなかったからであった。愛を求めて家出した蕭紅は，子供の頃の「裏庭」をその代償として捨てなければならなかった。

愛のある生活と帰るべき家があること，この両者は蕭紅にとって表裏一体のものとして認識されていた。こうした認識は冰心とは異なっている。冰心の「家」は常に暖かい庇護の場で，そこには助けてくれる母親がいて，安心できる処である。しかし，蕭紅の場合，

その楽園は，時には失楽園ともなる二面的な場所であった。子供の頃のとても「賑やかな家」と，成長した彼女にとっての「荒涼とした家」は，次第に愛が薄れていく「家」であり，楽園から失楽園へと変貌する「家」であった。茅盾は「呼蘭河伝」序に次のように言っている。

> 物事の理解がとりわけ早い女の子にとって毎日の生活はかなり単調であったことであろう。毎年，胡瓜や南瓜を植え，春や秋の天気のいい日には蝶々やイナゴ，蜻蛉が飛び交う裏庭。壊れた古い物が置かれ，暗くて埃っぽい倉庫。これらは彼女の気晴らしの場所であった。慈悲深く，童心を持った老祖父は彼女の唯一の理解者であった[15)]。

> この世では祖父さえいればそれでよかった。怖いものなど何もない。父は冷淡で，母は口が悪く，祖母は針で指を刺したが，こうしたことは何でもない。裏庭があるのだから[16)]。

祖父の死は，彼女にとって大きな転機となった。

> 祖父が亡くなったら，もう誰も私に同情してくれる人はいない。祖父が亡くなると，残された者はみな残虐な人たちばかりになった。これからは家を捨てて，大勢の人たちの中に入っていかなくてはならない。でも，私は玫瑰の木の下で震えていた。人々の中には私の祖父はいないのだから[17)]。

さらに，彼女は愛がないような家について，失望して，このように述べている。

「寒くなって来たから，もうこれ以上うろうろできない。やはり家に帰ろうよ」という従弟の言葉に，彼女は「何が家なの？　家なんて，まるで夜の広場，陽光も愛も無いところよ」と答えている。そうは言うものの，蕭紅は常に「家」に憧れていた。「『恋する人は火よりも熱い』しかし，寒くひもじい時が襲ってくると，私はその話が信じられなくなる」のである[18)]。

ここで『馬伯楽』の主人公に関する逸話を引くのも意味なしとしない。小説『馬伯楽』の構想を蕭紅が温めていたのは彼女が重慶にいた1939年頃で，1940年に香港に移るとすぐに彼女はこの執筆に取りかかったが，翌41年の夏には病のために擱筆せざるをえなくなった。未完に終わったこの物語の逃避生活を続ける主人公について，彼女は「もう私に

は書けないわ。……馬伯楽に明るい未来を結論づけようとしたけど，まだできないでいるのが残念よ」と述べている。自ら漂泊・流浪の身にあった蕭紅は，『馬伯楽』の主人公に「明るい未来」を約束しようとしていたのである[19)]。

東北の小都市呼蘭河からハルピンへ，ハルピンから北京へ，さらに青島，上海，日本，武漢，陝西，四川を渡り歩き，最後に香港で客死した蕭紅こそ，「明るい未来」を約束してくれる安住の場所を欲していたのである。こうした「家」への憧れは彼女の執筆活動の原動力となったと考えられる。

蕭紅作品の中に登場する「家」には，少なくとも三つの意味が込められている。その一つは，子供の頃の家への憧憬である。彼女は自分の記憶の中にある家を懸命に守ろうとしている。彼女は作家生活の後期に『山下』，『孩子の講演』，『蓮花池』など児童を題材とした一連の作品を創作している。それらの作品では子供の視線で捉えられた純粋な世界が俗悪で汚れた大人の世界と対比されている。世俗の垢にまだ染まらぬ子供の頃の家のイメージが蕭紅の脳裏で理想化されていた。

二つ目は，自然な状態のままにある「家」に対する賛美である。これは蕭紅作品の一つのテーマである。「裏庭」を離れる時の特殊な雰囲気は，馮二成子と趙大姑娘の愛怜との関係に表現されている。馮二成子の妻が死に（蕭紅の筆になると，女性はいつも短命となる），子供が死に，「裏庭」の家主もまた歳をとって亡くなるというように，まず弱者が人生の「裏庭」を離れていく。しかし，「裏庭」はそれで枯れ果て生気を失うのではなく，毎年新たに生まれ変わり，自然の姿を人々に印象づけている。『后花園』の胡瓜や南瓜，そのほか様々な雑草，にぎやかな裏庭とひっそりとした粉挽き小屋，こうした風景を蕭紅は自叙の書き出しとしている。蕭紅の晩年の作品には郷土色，民俗色が色濃く滲み出ており，彼女はそうした自然の中にある「家」を賛美し，人の動きも自然と融合させて描くようになった。『黄河』の中では河の流れに逆らって舟を渡す船頭たちの豪放さを描き，彼らのひたむきな精神が自然の中で輝いている。『広野のこだま』では強風の無常さと人物の憂いがみごとに描かれている。『小城三月』では美しく短い春と翠姨の愛がはかない命と同じように描かれている。『北中国』では雪で真っ白になった寂しい庭が耿大先生の寂しさと関連づけられている。

三つ目は理想を実現する場としての家である。蕭紅は，たとえ現実の世界が「氷のような冷たさと憎悪」に満ちていたとしても，生涯，人の生き方に関心を寄せることをその任とした。「家」は本来「温かさと愛に満ちたところ」である。長い旅の生活が続いた蕭紅にとって，「家」は彼女の理想を実現する場であり，追い求める対象であった。そしてそ

れが創作の力となった。彼女は，温かさと愛に満ちた未来のすばらしい「家」を想い描いていたのである。ただ，相対立するものを描くという蕭紅の手法は「家」の場合にも適用された。子供時代の裏庭のある家と父親の家を対立させ，そこに愛，恨み，憂いなどを交錯させて女性の生き様を描いたのである。蕭紅からみれば，女にとっての「家」とは愛の巣であり，性による差別も侮辱もない，理解と寛容さに満ち溢れた健康的で理想的な場所であった。

生涯不遇であった蕭紅は，現実生活の上では，最後まで「温かさと愛」のある場所を見つけることができなかった。彼女の理想の追求とその道程が未完に終わったことは，彼女の人生論を検討する上で最良の注釈となろう。

3 「愛」：理想の愛の追求と挫折

上述のように，蕭紅の人生は愛を探し求め続けた一生であったということもできる。しかし，意外にも彼女は，「恋愛小説」といえるものを書いていない。彼女は愛をテーマとして正面から描くことはほとんどなく，登場する人物も愛の主人公としては扱われない。彼女の作品に描かれているのは，得るところのない不遇の愛や，貧窮・愚昧・無理解などが原因で命までもが奪われる惨劇や，愛の無い人生についてである。

女性の叙事として『呼蘭河伝』を読み解くと，この作品は抑圧され続ける女性の生涯を叙述していることがわかる。生まれてくる前から結婚相手を決められていた主人公の女性は，嫁ぎ先に嫁ぐ前に，その家が没落してしまう。しかし，相手の男がどうあっても嫁を取るというので，彼女はその男のもとへ嫁がざるをえなくなる。そして，嫁いだ先では夫に愛されないだけでなく，兄嫁と合わず，さらに舅や姑からは馬鹿扱いされ，さんざん虐待される。この結婚を決めたのは彼女の母親であったが，その母親からも「これがおまえの運命だよ。耐えなきゃいけないよ」[20] と言われる始末である。

若い女性たちは，自分がなぜそのような運命にあるのかも理解できず，最終的には，井戸に身を投じたり，首を括ったりして悲劇的な生涯を閉じる。

> 昔の言葉に「女は戦場に行かんでもいい」というのがあるけど，それは違うよ。この井戸はとっても深いんだ。男衆に聞いてごらん，この井戸に飛び込む度胸があるかって。どいつも怖がって，飛び込めるわけないよ。だが，若い女は飛び込んだんだ。戦場じゃ絶対死ぬとは限らんし，凱旋してきて，「何でもいいから官職をくれ！」と

騒ぐやつだっているさ。でもさ，井戸に飛び込んだ人はみんな死んじゃうよ[21]。

これは『呼蘭河伝』における女の運命に関する「語り」である。一般論ではあるが，数千年来，中国で連綿と続いてきた女性の運命を実に的確に表現している。ここで作者は「節婦坊の上にはなぜ女が井戸に飛び込む勇気を讃える言葉が書かれていないのか」とも問いかけている。「節婦坊」とは「節婦」を讃えて男たちが造るもので，そこには普通「温文爾雅，孝順公婆（やさしく上品で，舅姑に孝行した）」と書かれる。男性が望む女性の姿は，まさにこうした「節婦」たちであった。つまり，女性が男性に気に入られるためには，女性はひたすら周囲の男たちに尽くさなければならなかった。そうしたことに疲れきって，逃げ場もない女性たちは，最後に自らの命を絶つより仕方がなかったのである[22]。

ところで，大きな反響を呼んだ胡風の「『生死場』読後記」は，現在読み返してみると，誤読があるようにも思われる。問題は次の一節である。

> 読者を興奮させるのは，この本が愚かな夫婦の喜びや悲しみを描いただけでなく，鋼鉄のように強い戦闘的意志を表したからである。これは一人の若い女性の手になるものであるが，この中に私たちは女性の繊細な感覚とともに，女性らしからぬ強い心を見出すことができる[23]。

しかし，『生死場』の中で蕭紅がもっとも表現したかったことは，「女性らしからぬ強い心」ではなく，どうしようもない女性の生き様でもあった。金枝と月英単は，その名から想像される姿は細腰の美しい女性である。しかし，既婚女性に対する蕭紅の描写は一般的に極めて単調で冷ややかなものとなる。常に夫を恐れ，反抗せずに従うだけの彼女たちは，夫の前ではあたかも「蝋が溶けるよう」であっても，その心中には悲哀感が満ち溢れている。その状態を蕭紅は『生死場』の中で「心はまるでしなびた綿のよう」だと表現している[24]。かつては花のように美しかった金枝玉葉も最後は男に扼殺されてしまう運命にある。

男性との何度かの交際を重ねた末に，『生死場』の女主人公・金枝は，男性に対する認識を次第に変えていく。彼女は，初めは逞しい農村青年の成業に誘惑され，愛の喜悦と青春の欲望をもって，自分自身を成業に捧げる。この故事は，貧苦の中にある娘も青春の年端の行かない時（蕭紅の筆になると「美しく温かみのある後花園の時期」）にはみな「金枝玉葉」ごとくであるが，結婚すると干からびて，「残花敗柳」のように成り果ててしまうことの喩えである。これは愛し合うこの男女だけがまだ目覚めていないが，相手を持つ

すべての人がその残酷さに目覚め，金枝と成業の恋愛故事に関心を持つようになるのである。

成業の叔母は，猫を怖れる鼠のように叔父を怖れていて，甥の成業に向かって，「あなたの叔父は，若い頃あなたにそっくりだったけど，今では死んだ木のようでもう生き返ることはないわ」「私は男の人が怖いの。男の人は石のように硬くて，私は触れることもできないの」と言っている。叔父の関心は金枝が美しいかどうかではなく，この若い娘が「自分たちの家に来てどのような仕事ができるのか」ということにあった。そのため金枝の母親は娘の婚姻の将来を憂慮したのである[25)]。

蕭紅は男女の交わりの場面について，書いたことがある。しかし，それは愛の交じわりではなく，むしろ肉体的な行為について，非常に大胆に以下のように書いているとしか思えない。

> 五分を過ぎてから，娘は雛鳥のように獣になった男に地面の上で圧し掛かられた。男は狂ったのか？彼の大きな手は敵意に満ちたように，もう一つの肉の塊を摑んでいた。この熱い肉（体）を壊そうとするかのように，（興奮で）出来るだけ血管を広め，まるで彼は死体の上で動いているようであった。女の白い丸みのある脚は彼をからめられない。そして，全ての音はこの二つの貪るような怪物たちから作り出された。女はうめくような声をあげ，骨も軋み，男は荒い息をしながら，怒鳴っていた[26)]。

以上のようにここには男女の愛を感じるような表現は全く見受けられない。この場面の描写から，私たちは蕭紅が男と女の本来の愛し合う姿，幸せの一時よりも，肉体的な行為に対し，恐怖と嫌悪感を覚えるということをここに示していると見ることができる。ここにも蕭紅の男女の愛に対する考え方（男性観）を窺うことができる。

金枝が結婚して間もなく，「刑の執行の日」が訪れた。彼女は悲惨の出産をし，嫁に来て４ヶ月も経たないうちに徐々に夫を呪うようになり，夫は厳しく冷たい人だと感じるようになった。さらに，蕭紅は金枝と成業の子供に僅か１ヶ月の命しか与えられなかった。しかも，それは夫の成業の手によって殺された結末と書いた。

ここからでも非常にはっきりと，蕭紅は金枝の悲劇は男性の圧迫と愛のない世界の冷酷さの帰結であると論じている。「生死場」の中で蕭紅は次のようにいう。金枝は以前にも男を恨んだ。金枝は勇敢にも都市へと入り込んだが，恨めしくも男の暴力行為によってまた故郷に戻ってきた。彼女は「日本のやつら」も恨んだ。日本の侵略者たちは彼女を故郷

から引き離し，流浪の果てに身を売るはめにしたのである。しかし，彼女が最もこころを痛め，最も恨んだのは男たちであった。最後に，金枝は中国人以外に何も恨んでいないという心境に陥った。抗日の主題と言われた作品であったため，この言葉は文章の中で唐突であった。この点に関して，中国ではあまり論じられていないが，日本の研究者の間ではすでに言及されている[27]。

初めて正面から女性の愛について，取り上げたように思える小説は『小城三月』である。この作品は蕭紅が死の直前に最後の力をふりしぼって書いたものである。同じような悲哀を主人公・翠姨も経験する。翠姨は小さな町，呼蘭河のさまざまなタブーに縛られて生きている女性である。彼女は持ち前の尊大さで，自分の住む小さな町の変わらぬ生活を恐れる一方で，内心では生活環境が変わることを願いつつ，町の文化的な生活や流行の生活に同化されることを拒んでいる。そうした翠姨の「愛」は絶望的な「愛」であった。翠姨の一生の中で，何が彼女を狂わせたのか？　翠姨は愛に目覚めて，「愛の幻想」のなかで暮らしている。しかし，彼女の妹はいちいち考えたり，生活の現状に疑問を感じたりしない。ただ状況のままに流されて行くタイプである。こうした妹の対極に位置づけられた翠姨は，自分の求める「愛の幻想」の代価として自分の命を捧げることも辞さない女性として描かれる。つまり，翠姨にとっては「愛」はまさに女性の拠り所であり，その「愛」が叶わなければ，目覚めた女性は苦しみの果てに死ぬよりほかなかったのである。

『小城三月』の中で，蕭紅は女性の世界を見つめる女性の視点を示している。ここで蕭紅は，「私」という母親の視点から二人の姉妹の生活を描いている。「私」は，母親らしい鷹揚さと理解をもって姉妹に対している。それに比べて男性たちは，感情が鈍く，彼女たちがいくら努力して男の気を引こうとしても，無視するか，当然視するかのどちらかである。間の抜けた従兄は，根本的に女性の気持が理解できない人間であり，彼女たちに恋心を持つこともない。こうした苦渋に満ちた「愛」のために，結果的に翠姨は自らの命を代価として払うことになるが，そうなっても従兄はただ同情するのみである[28]。

蕭紅がこうした女性の悲劇に対応させて描く男性像にも特徴がある。彼女の作品中では，結婚後の男性はすべて「覇王」的存在である。『小城三月』の翠姨の骨身にしみるほどの愛に対しても，従兄は何ら反応を示さない。商店街のカップルは，女の「私」がいつも弱者で，夫のために悔しい思いをしながら生きている。

このように女性はいつも我慢強く生きている。また，「温かな翼を求めて」という言葉は彼女の常套句になって，『呼蘭河伝』や『生死場』，商店街シリーズの中に頻出する[29]。女性は幼年期から耐え忍ぶことが運命とされ，結婚を境にしてそれはさらに加重される。

どこへ行っても女性は悲惨な運命から逃れることができない。『生死場』に登場する金枝が一連の悲劇に遭遇するのは，貞操を失ってからである。嫁入りという行為があたかも「叩き売り」のように，夫から無視され，侮辱され，最後は全ての男たちから苛められる。金枝の悲劇は，当時の男性社会で女性が「愛」を求めることは絶望的であり，どうあがいても仕方がないことを物語っているようである。

ただし，現実の女性に対する蕭紅の観察眼は冷静である。たとえ相手が母親であっても純粋に一人の人間として観察している。前述したように，彼女の母親は終生父親に尽くすことを本分とし，子どもに対する母親としての責務をなおざりにした。『呼蘭河伝』にはその頃の彼女の境遇が次のように概括されている。

> これまでの十年は父との闘いの日々だった。その間に人間とは何と残酷なものだろうと感じた。父は私に対して良い顔をしたことはなかった。下男に対しても，祖父に対してもそうだった。下男は貧乏人，祖父は老人，私は子供だったので，頼れるものがいない私達はみな父の手中に落ちたのだった。その後，新しい母が来たが，やはり父の手に落ちた。父は彼女が気に入っているときは一緒に笑ったが，怒ったときは毒づいたので，母は次第に父を恐れるようになった。母は貧乏人でも老人でも子供でもなかった。それなのにどうして父を怖がるのだろう？　隣の家に行ってみても，隣の奥さんも夫を怖がっている。叔母も叔父を怖れている[30]。

女は一生男の侮辱と搾取から逃れられない。母親が蕭紅に対し冷淡であったことはこうした女の運命と無関係ではなかった。抑圧されながらも男に頼らざるをえない状態，これが蕭紅の見た現実の女性たちを取り巻く基本的環境であった。

蕭紅の作品の中で女性は例外なく我慢強く，内心は敏感であり（たとえ『生死場』の二里半という農民の嫁であっても旦那を恐れ，機嫌をとるように気をつけている），永遠に素晴らしい生活に憧れている。たとえ屈辱と粗雑な生活であっても，成業の叔母はいまだに夫との幸せな生活の記憶を呼び覚ましたいと思っているのではないのだろうか？　夫が酔って寝てしまった後も一人そっと抜け出し，物思いに耽っているのではないのだろうか？　この描写はとても感動的で，田舎の女性である成業の叔母の心理が描き出されてはいるが，同時に蕭紅の内心を独白したものでもある。「彼女は彰子が耳元で鳴いているのを聞きながら，完全に力が抜け，気持ちは暗くしずんだ」（『生死場』）。これは蕭紅の考える女性の逃れがたい運命であり，永遠の悲しみである。

彼女は早くから独立した女性であることを志し，毅然として父親に挑戦した。しかし，父親の下から飛び出しても，残酷な現実の社会には彼女の理想を叶えてくれるところを見出せなかった。初めは無責任の男と駆け落ち後，みごもったまま旅館に残され，毎日負債し，返らない男を待ち続けていた。妓楼に売り飛ばされそうになった時，蕭軍が助けてくれた。それを契機にして，しばらく彼との熱愛が続いたが，やがて彼女は深い喪失感を伴う苦痛に苛まれるようになった。さらに，男に対する従属的立場から脱け出した彼女の前に第三者が出現した。戦乱を契機にして彼女は，小心者で威張り屋でご機嫌取りではあったが，それほど男性主義者ではなく，お互いの立場が平等でありえた端木に出会った。たとえ表面的ではあっても，このことが蕭紅の自立心や自尊心を満足させた。『蕭紅自集詩稿』と『蕭紅書簡』は，蕭紅の自伝的作品で，彼女自身の心を描写したものである。そのうち恋愛を歌った詩は『春曲』の 6 首である。これに対して，失恋を歌った詩は 11 首ある。これと日本に滞在していた時に書いた『沙粒』35 首には蕭紅特有の気質と個性が現れている。蕭紅は思いのほか率直に，家を飛び出した「イプセンのノラ」が共通して直面する現実との葛藤を，これらの詩の中に披瀝している。当時の蕭紅は，「千里の眼を窮めんと欲して，さらに上る一層の楼」――と意欲満々であった。しかし，それだけに現実とのギャップも大きかった[31)]。

蕭軍との愛情生活は，表面的には二人の性格の不一致によって破綻したように見られているが，根本的には，蕭軍の中にあった男性中心主義（東北地方の男性一般が共有すると思われる男尊主義）が蕭紅の不満を掻き立てたように思われる。さらに別の若い女性に対する蕭軍の行動と感情が蕭紅を深く傷つけたのであった。

蕭紅が発表しなかった詩の中に，蕭軍の浮気心に傷ついた彼女の限りない悲しさを吐露しているものがある。1937 年に書いた詩『苦杯』（全 11 篇）がそれである。彼女は次のように述べている[32)]。

色がついた愛の詩を一つ一つ書く　／　彼女のために
三年前　／　彼が私に書いたように
もしかすると　／　ずっと繰り返されるかもしれない
三年後に彼はまた書く　／　違う娘への愛の詩を

（苦杯　一）

かつての恋人は遮ってくれた　／　激しい風雨を

でも彼は，今変わってしまった　／　激しい風雨に
どうして抵抗できようか？　／　この私に
（苦杯　五）

彼はまた一人で公園に行く　／　公園のあの少女に会いに行く
小鳥のような紅い唇の少女
私にはもう鮮やかな唇もない　／　若くもない
油染みて汚れた服を着，生活のために流浪する私　／
少女のような気持がなくなった私
私は公園帰りの彼を待ち　／　明日の朝を待ち　／
食事の支度をする明日を待つ
（苦杯　六）

私には家がない　／　私には故郷もない
友達さえも失った私には　／　彼しかいない
だけど今　／　私に対する彼のこのような態度
（苦杯　八）

最後の第11篇で，彼女は全て儚い夢となって砕け散る自らの愛を締めくくっている。『苦杯』はまさに，彼女の心情をもっとも率直に吐露した詩集であるといっても良い。ここで恐らく蕭軍のことを指している「彼」の姿は，子供の頃の残虐な父親の姿と重なり合うようになる（苦杯七）。その後，彼女は創作の場を日本に移し，蕭軍と暫く距離を置こうとした。しかし，そうした彼女の行為も，結局は「彼」との関係を取り戻したいという一心から出たものであったのである。限りない愛情を抱き続ける蕭紅に対して，現実は冷酷であった。その間にも蕭軍はまた別の女性と恋に落ちていたのである[33]。

さらに，次の夫となる端木蕻良も彼女の気持ちを理解することができなかった。端木蕻良は彼女の愛と甘えに応えられなかったばかりでなく，彼女を母親のようにして頼ろうとしていた[34]。

こうした「愛」の挫折が，蕭紅をして男性や結婚生活への関心を衰弱させ，死の直前に発した「生涯白い眼で見られ，冷遇され，悔しい」という淋しい感懐だけが残されたのである。こうした彼女自身の愛の遍歴が，女性の存在の悲劇的境地，即ち，貧困と男に一生

を支配され，心に悲しみを抱きながら，愛の無い生活を一生過ごす境地を描かせることに結びついているのである。

4　個人的経験の投影

蕭紅作品の見直し作業は，蕭紅作品の中に隠されている未解読の言葉の発見や作品中に込められた蕭紅の意図の解析によって可能となる。

蕭紅の叙述の中には彼女自身の個人的な怖れと困惑が多分に含まれているように思われる。また，彼女の描く女性の苦難の道のりは，漂泊者としての彼女自身の経験の投影として読み解くと理解できるものが多い。身の置き場がなく，魂の救済の方法がないという，限りない寂寥感は彼女の現実生活における実感であると思われるが，『生死場』の中で尼寺にさえ居場所を求められない金枝や，自らを追い詰め服毒自殺をはかるが未遂に終わり，まるで生き地獄を生きていかなくてはならない王婆の姿には蕭紅自身の現実が投影されている。その生き様は生に対する渇望ではなく，あたかも死にきれない精霊のようで，生と死の間をさまよっている。逃亡生活を続ける馬伯楽，満州国から中国内地に逃げて来た二人の青年作家などにも作者の「自画像」が投影されている。激しい飢餓感に苛まれパンに呑み込まれてしまいそうな自分（商店街シリーズ），暴行する男の身体の重さで意識を取り戻してもがく金枝や美しく多情な月英（『生死場』），春のようにはかなく短命な翠姨（『小城三月』），彼女たちは，非情な運命に翻弄されながら，一人としてその運命を変えることができず，残酷な運命にその身を破滅させられてしまうのであるが，これも蕭紅自身の体験に基づいた叙述であると思われる。

もし蕭紅の初期の作品である『生死場』が，侵略に対する民族精神の喚起のためだけに書かれていたとしたら，今でも中国人読者の慰めとなったであろうか？　また，商店街シリーズが「貧しさの中の楽しさ」をモチーフとしていたら，いっそう好感をもって受け入れられたであろうか？　さらに，ほとんどどうすることもできない哀れさが満ちている蕭紅の後期の作品群は，それを理由にして評価が下がるものであろうか？　これらいずれの疑問に対しても「否」と答えなければならない。蕭紅作品の真髄は，女性の生き方に対して真摯な眼差しが注がれている点にあるからである。中国現代文学史上，女性の「生き方」について最も深い関心を寄せた作家をあげるとすれば，おそらく蕭紅になるであろう。たとえ歴史的な重大事件を直接取り上げなくても，彼女の作品中の女主人公たちは歴史的存在としてのリアリティをもっている。作中人物たちがそうしたリアリティを持ちうるの

は，蕭紅の感受性豊かな眼が現実の社会を直視していたからである。こうした現実直視の洞察力と前述の自己投影の技術が見事に噛み合っているところに蕭紅の作品のすばらしさがあるのである。

さらに蕭紅作品は独特な芸術的美意識を醸し出している。女性の心境，人生の回想シーン，現実社会における女性の葛藤，こういうものに対する蕭紅の描写は，細やかで写実的であり，そこに独特な哀感が漂っている。こうした表現能力はいわば天賦の才能というべきものであるが，一つ指摘できることは，女性が女性であるがゆえに抱いている不安感に蕭紅は極めて敏感であったという事実である。

蕭紅の描く女性たちはみな欲望の対象となり，虐待される。男たちは，農村青年であっても知識人であっても，女性を軽視あるいは蔑視しているという点においてはみな同じである。こういう状況の中で女性が示す「やさしさ」，「しとやかさ」，「慎重さ」，「気遣い」などは，一見卑屈なほどに感じられるであるが，蕭紅は，そうした行為が「あたりまえのこと」として自覚化されない当時の状況を，単なる女性たちに対する憐憫の域に止めずに，女性たちの中に本源的に宿されている「あたたかさ」や「強さ」を滲ませながら描くのに長じていたのである。ここにも彼女自身の女性像が投影されているように思われる。

『生死場』に登場する女性たちは，出産すなわち次から次へと子どもを産んでいくために存在しているかのようである。どれだけ「愛」を渇望しても，決してそれが得られない。蕭紅は自ら二回も出産を経験しているが，一度も母親にはなれなかった。こうした彼女の不遇な出産経験が『生死場』の描写をいっそうリアリティのあるものにしている。彼女の一生は短いながらも女性の全ての不幸を体験したようなものである。したがって，そうした自己の経験を見事に投影してみせた蕭紅の作品はシモーヌ・ド・ボーヴォワール（Simone de Beauvoir 1908–1986）が書いた女性に関する優れた論述の一種の注釈のようにもなっている[35)]。

中国文学史上で，蕭紅作品は当時も今も間違いなく特異な存在である。蕭紅は丁玲のように戦争や革命と直接的な関係がなかった。丁玲は，意識的に政治的世界の中で創作活動を行った革命作家であった。彼女の波乱万丈の生涯は，当時の中国社会の歴史と不可分であった。たとえば『水』という丁玲の作品は，その当時の厳しい自然環境と国民的危機の中で戦う農民群像を描いたものである。この作品は丁玲の創作過程においても重要な転機となったものであるが，中国革命文学の発展に寄与するところも大きかった。これに対して，蕭紅作品は革命的であるとはいえなかった。彼女の体験に基づく作品群は，広く女性のこころを捉えるものであったし，ひいては人類史的な課題に深く分け入ったものであっ

たといえる。丁玲と蕭紅は対照的な中国南北の小都市の出身である。二人の作風や文体には個人的な才能もさることながら，相異なる地域文化が反映されているように思われる。「駿馬は秋風に乗って塞北にあり，杏花は春雨に濡れて江南に咲く」と言われるように，蕭紅は中国内地文化が取り入れられて間もない東北地方出身者らしい初々しいスマートさをその作風に滲ませたし，一方，丁玲は革命の大波に呑み込まれた伝統的地域の出身者らしく，文化的深みを背景にしながらも変革者らしい率直さを押し出した[36)]。

また，蕭紅は同時代作家の関露とも対照的な面を示している。二人はともに 1930 ～ 40 年代に女性作家として頭角を現した。この二人は実生活の上でも，創作活動の上でも交流はなかったが，女性の性に注目して創作活動を行ったという点では共通点を持っている。しかし，関露が「都市の悩み」を描いたとすれば，蕭紅は「田舎の悲しみ」を表現したといえる。『春天里』などの作品で知られる関露は，職業革命家としての活動を続けながら，詩歌をよくした。彼女は最後に仲間から政治的迫害を受けて自殺するが，そうした不遇さは戦乱の中で 8 年間も異郷をさまよった蕭紅の経験とは似て非なるものである。二人は同時代の女性を描く傑出した女性作家であったが，二人の置かれた状況の違いが女性の描き方の違いとなって現れた[37)]。

最後に，当時女性について言及するところの多かった胡適と蕭紅の比較をしておこう。当時の胡適の関心は，新生活の担い手として女性がどのように貢献できるかにあり，新しい生活のスタイルに適う女性を「新女性」と呼び，彼女たちに「超良妻賢母主義」を説いた[38)]。これはまさしく外服薬をもってこころの病を治そうとするかのごとき行為である。これに対して蕭紅は，現実社会の女性たちの悲劇的境地をできるだけありのままに描くことによって，女性のあり方を問おうとしたのである。彼女にとって女性は外在的に変えられるものだけではなく，内在的に変わらなければならなかったのである。

結　び

これまで見てきたように，蕭紅の女性としての生涯は決して恵まれたものではなかった。彼女は幼少期に母親を失い，さらに最愛の祖父を失い，若くして家さえも失うのである。彼女の恋の遍歴も悲しく苦しいことの連続であった。結ばれない初恋から始まって，駆け落ちした後に身籠ったまま捨てられ，人質にとられた問題絡みの一回目の事実婚，蕭軍との心労の重なる結婚生活，心が通じ合わなかった端木との結婚生活……等々。彼女は出産も二度経験しているが，一度は貧困のため子供を病院に捨て，蕭軍と別れた後の出産は死

産であった。20歳の時に「父親の家」を出奔して以来，香港で客死する31歳まで，彼女は戦火と病魔に追われるような流浪生活を送った。戦乱の渦中にあった香港で彼女は非業の死を遂げることになったが，医者の誤診で咽喉を切られ，手術直後に無理やり移動させられたためであった。

そうした境遇にありながらも，蕭紅が作品を通して訴えようとしたことは，当時の中国女性の生き様であった。「女性の生き様」こそ彼女の最大の関心事であり，同時にそれは彼女の創作意欲を呼び起こす源泉であった。ただ女であるというだけで憑いて回る劣等感が蕭紅の内面を常に突き動かしていた。彼女の描いた一連の女主人公たちは，例外なく温かさと愛を求めていた。しかし，その女主人公たちが現実生活の場で直面するのは，男たちからの肉体的・精神的打撃であり，絶え間なく押し寄せる社会的圧迫であった。

蕭紅は自分自身の心の窓を通して群衆の動きや周囲の情景を観察している。それは，あたかも高性能のビデオカメラのようにも見える。彼女の生まれ育った時代状況や地域環境はまさに疾風怒濤のごときものであったが，それを蕭紅は彼女風にパラフレーズして作品中に見事に映し出している。以下に列挙する蕭紅作品の諸特徴は，蕭紅が疾風怒涛の時代の申し子であることを，まさに彼女独特なオリジナリティをもって敢然と主張したことによって獲得されたものであり，それが彼女の作品にゆるぎない普遍性を与えているのである。

1. 蕭紅の作品には濃厚に個人的事情が反映されている。幼少の頃から「おませ」で敏感であった彼女は，幼少期の記憶を鮮明に再現することができた。その記憶自体が敏感な彼女にはすでにアンビバレントなものであったが，彼女の後半生と比較すればまだ多くの理想化できる要素を含んでいた。また，彼女の後半生の尋常でない経歴や漂泊生活は，彼女の創作活動そのものを高度に芸術化された鬱憤の発散の場とすることによって，蕭紅作品に一種のダイナミズムを付与している。

2. 蕭紅が作品中で描く「愛」は「実りのない愛」であり，「打ち砕かれる愛」である。彼女は男女両性間に実際に存在する不平等の描写を通して，“五四”以来の「愛」の直接的賛美をテーマとする作風の非現実性を暴露したのである。蕭紅作品の特徴は，より現実的な女性の悲劇を描くことによって女性の「愛」に対する希求の根強さを示そうとしたと言う点にある。

3. このことに関連して付言すれば，“五四”時期の女性作家たちが，自分と同じような名門出身の知識人女性を描いたのとは違って，蕭紅の視線は農村女性たちの生き様に向かっている。彼女たちの多くは「村娘」であり，「愚婦（教養がない女）」であった。こうい

う女性を対象にすることによって，当時の中国の社会改造の課題もより鮮明になったと思われる。彼女の作品が大衆から根強い支持を受けたのは，こうしたリアリズムに根ざしているからであると考えられる。

4. 中国現代文学の第二世代とされる女性作家たちの中で，蕭紅は女性意識が最も鮮明な作家であったということができる。彼女は彼女の繊細な視線を通して，当時の中国女性の姿をリアルに描き出した。

蕭紅によれば，女性は帰るべき家のない漂泊者である。また，人間的な「温かさ」や「愛」を憧れ続ける存在でもある。蕭紅が作品中で論じている「女性の生死」「女性とお産」，「女性と家」，「女性と愛」の問題は，決してその場限りのテーマではなく，社会的性格を有する人生の普遍的命題であった。その本質的意味を問い詰めていったとき，蕭紅が探り当てたものは，当時の女性に共通する避けられない運命であった。蕭紅がことさらに描いた，運命に翻弄され，物質化されても，そのことを自覚化できない女性の世界はまさにそれであった。そしてそこに着目したことが彼女をして「国民性の改造」という課題に接近せしめることになるのである。

注

1）蕭紅研究の盛況ぶりについては平石淑子編『蕭紅作品関係資料目録』汲古書院　2003 年及び拙論「蕭紅研究在中国」『國學院大學外国語研究室・文化学科紀要　Walpurgis』2002 年を参照されたい。
2）魯迅は蕭紅を将来最も希望がある女性作家として高く評価し，『生死場』の序文で，序文の制限もあったかもしれないが，「女性作者的细致的观察和越轨的笔致」と述べたところにとどまっていた。
3）孟悦・戴錦華『浮出歴史地表』河南人民出版社　1989 年
4）鄒午蓉「独特の視角，深切なる憂憤」『現代作家作品評論』江蘇教育出版社　1994 年
5）曹利群「時代，そして女性の関懐及び女性の文章」『中国現代文学研究叢刊』1999 年第 2 期
6）「生死場」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
7）「王阿嫂の死」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
8）「生死場」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
9）拙論「蕭紅文学における覚醒への不安」『藝文研究』74 期 慶應義塾大学藝文学会　1997 年
10）駱賓基『蕭紅小伝』上海建文書店　1947 年
11）「呼蘭河伝」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
12）「失眠の夜」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
13）「商店街」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
14）「后花園」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
15）茅盾「呼蘭河伝」序　『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
16）「呼蘭河伝」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
17）「祖父死了的時候」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年

18）「初冬」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
19）袁大顿「怀萧红――纪念她的六周年祭」『星岛日报』載 1948 年 1 月 22 日
20）「生死場」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
21）「呼蘭河伝」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
22）「呼蘭河伝」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
23）「生死場」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
24）「生死場」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
25）「生死場」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
26）この場面は 1934 年 4 月に「麦場」というタイトルで『国際協報』で発表されていたが，1935 年に発表された「生死場」ではこの内容が削除されていた。
27）秋山洋子「ふたりの女流作家」『革命中の女性たち　世界の女性史 17』評論社，1976 年
平石淑子『蕭紅研究』お茶の水女子大学博士論文　2005 年などがある。
28）「小城三月」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
29）「小城三月」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
30）「呼蘭河伝」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
31）拙論「蕭紅女性意识觉醒的彷徨」『芸文研究』74 期　慶應義塾大学藝文学会　1997 年
32）「苦杯」『蕭紅全集』哈尔滨出版社　1998 年
33）このことは後に蕭軍自身によって明らかにされた。『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』黒龍江出版社，1981 年
34）周鯨文の証言 駱賓基『蕭紅小伝』上海建文書店　1947 年
35）桑竹影等訳 Simone de Beauvoir 西蒙・波娃『第二性――女人』湖南文芸　1986 年　原著は 1949 年にフランスで出版。
36）拙論「試論蕭紅と丁玲」《文学・歴史伝統与人文精神》中国社会科学出版社　2003 年
37）拙論「蕭紅と関露の比較研究」東京語文学会　東京語文学会百回記念論文集　2000 年
38）胡適「美国的婦女」『新青年』第五巻第三号　1918 年 9 月